

令和5年度 【 学園研究費助成金< B > 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ

氏名 米田 公則

研究期間 令和5年度

研究課題名 ポストコロナ時代における地域観光の可能性に関する国際研究

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	米田公則	文化情報学部	教授

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

コロナ・パンデミックの観光産業への影響は世界的なものであるが、その影響のあり方は、各国地域のコロナ対策並びにその影響を受けた観光産業、地域への救済的処方によって異なるものとなっている。本研究では第一に我が国とタイ国とのコロナ感染症拡大後の観光産業への影響、それに対する対応策を明らかにする。GDP2割が観光業によるものといわれるタイ国と日本とは当然、影響のあり方が異なると想定される。それを踏まえ、第二に、CBTで成功をしたメイカンポン村の地域コミュニティへの影響、変化を具体的・実証的に明らかにする。観光業で成功をしているからこそ、逆に影響を大きいことが予想される。第三に、ポストコロナ状況下のCBTの新たな取り組み、今後の展望を明らかにする。

2. 研究の推進方策 (300字程度で記述)

- (1) 日本とタイ国とのコロナ感染症に対する取り組みの相違を踏まえ、観光業への影響を明らかにする。具体的には、①日本とのタイ国の観光産業の影響を示す資料収集②タイ・Payap大学 CBT 研究所・元研究員へのヒヤリング調査
- (2) タイ国現地調査(1)・チェンマイ県・観光振興課への調査
 - ・観光産業の実態解明のための資料収集・タイ国の観光政策・計画に関する資料収集を行い。
 - ・観光振興担当者へのヒヤリング
- (3) タイ国現地調査(2)・メイカンポン村現地調査
 - ・現地の住民リーダーへの聞き取り調査を実施・現地視察

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本年度、タイ国への実施調査を夏休み期間に実施した。その期間に、タイ国現地調査として、①タイ国並びにチェンマイ県の観光行政当局へのヒヤリング並びに資料収集調査、②Payap 大学ウェラポン氏への CBT の実態についてのヒヤリング調査、③タイ・メイカンポン村現地調査を実施した。

- ① 観光行政当局へのヒヤリング並びに資料収集では、観光旅行者の急激な減少、特に中国人観光旅行者の減少が大きな影響を与えたことが明らかになった。しかし残念ながら、現在その影響についての実態は十分に分析できていないとこの当局者の話であった。
- ② Payap 大学ウェラポン氏へのヒヤリング調査においては、ヒヤリング調査では、CBT は、主な需要がタイ国内での国内観光者が主流であるために、国際観光のような影響は限定的であるとのことであった。しかし、CBT の中でも、外国人観光客が多い地域では影響があったとのことであった。それ以外に、チェンマイを中心とした北部タイの観光は外国人観光客のうち、特に中国人観光客の占める割合が大変高いために、中国政府のゼロコロナ政策による影響は大変大きかったとのことであった。しかし、CBT 観光自体は、国内コロナ政策の影響のみであり、マスツーリズムほどの影響はなかったとのことであった。
- ③ タイ・メイカンポン村への調査においては、現地に入り、村の観光リーダーなどへのヒヤリングを実施した。コロナの影響により、その直後には全体の観光客数は2割程度に落ち込んだとのことであった。しかしながら、CBT 自身は国内観光客を対象としているウェイトが高いために、その後回復し、現在はピーク時の8割程度に回復しているようであった。しかしながら以前は、コミュニティとして取り組みを行っていた観光活動のうち、アクティビティなどが実施されておらず、地域全体に影響を与えたことがうかがえた。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①地域観光	②コミュニティ・ベース・ツーリズム	③	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

現在、収集した資料の分析・まとめ、並び今後の研究成果への取り組みを実施中である。2月期に当初予定をしていた補充調査が、円安の影響により、実施困難となった。そのため、研究成果を発表するための十分な資料・現地調査を実施することができなかった。また、共同研究を進めていた Payap 大学ウェラポン氏が、現地調査直前に、大学を退職したために、大学研究機関との共同研究を進めることができなかった。ウェラポン氏はコミュニティ・ベース・ツーリズム支援の独自組織を立ち上げ、取り組みを続けており、今後はこの組織との継続的な共同研究を進めていきたい。また、タイの地域観光の在り方を研究する中で、日本国内での地域観光との違い、についての研究が比較研究という観点からもより一層重要であることが確認された。今後は単に国際研究にとどまらず、国際比較研究という観点で、地域観光の今後の在り方について研究を進めていきたい。